

支え合うこと

岐阜市立加納中学校 3年

平井慧翔(ひらい けいと)

「僕の母は耳が聞こえません。」

コロナ禍、マスク生活が当たり前となった中で、母と外出することが増えてきました。これまでだったら、母は口の動きで相手の伝えたいことを読み取り、そして自分の口で思いを伝えていました。でも、感染症から命を守るためのマスクは母からコミュニケーションの手段を奪ってしまったのです。「袋いる?」「ポイント使う?」最近、よく母に僕が伝える手話です。お店で買い物をする時、店員さんの何気ない声かけにまったく気付かない母に、僕が伝えることが増えてきたのです。

僕たち家族にとって手話は、生活の中に自然とあるものです。幼稚園の頃から姉や兄が使っているのを見て当たり前前に覚えてきました。

僕が小学6年生の頃、母は、耳が聞こえない子たちを集めて手話を使ったミュージカルを企画しました。母自身も聾劇団に入っていた経験があり、手話劇を通して、共生社会を考えたいという思いからでした。僕も1回目の公演に参加しました。いろいろな地区から耳が聞こえる子も聞こえない子もたくさん集まってきました。みんなで一生懸命練習をしたり、休憩の時には、たくさん会話をしたりしました。その時、僕の心に浮かんだ言葉は「普通」という言葉です。参加した仲間と伝えたいことを言い合ったり、お互いを思いやった行動をする時間はとても大切に楽しく、僕にとっては、普段の学校生活と何ら変わらないものでした。そして今、2回目の公演に向けて、再び仲間と活動しています。母は表情や体の表現がとても上手です。企画を立ち上げ、全身を使って子どもたちと関わる姿を、僕は尊敬しています。

昨年度、生徒会が中心となり「共生社会」を考える交流会を行いました。僕は、障がいがある人、ない人との共生を考える学習が始まるのがとても楽しみでした。それは、僕にとっては当たり前と感じていることも、多くの人にとっては当たり前ではないと感じることがよくあったからです。「聾学校って耳が聞こえない子たちが集まるんだよね。大変だよね。」「特別支援学級って障がいがある子が入るんだよね。」そのような言葉が教室から聞こえてきました。でも、母もミュージカルに参加する子の中にも、聾学校に通っていない子はいます。特別意識をしているわけではないと思うのですが、僕にははっきりと差別をしているように感じて悲しくなりました。

「共生社会」を考えるスタートとして、聾学校の生徒が少年の主張で発表している映像を見ました。彼女が話していた思いを伝え合うことの大切さ、そして大変さは、僕の家でもよく話題になっていたことでした。それは、初めて会った人には、耳が聞こえないということが分かりづらいからこそ、伝わらない大変さがあります。でも、一生懸命自分の思いを伝える彼女の発表を聞いていると、何かしなければならぬと思うようになりました。コロナ禍のため、楽しみにしていた聾学校との交流もなくなってしまいました。でも、共生について考えたことを生徒会が聾学校に伝えてくれました。僕は、ようやく正しく理解するための場が学校でも始まったことがとても嬉しかったです。

耳が聞こえない人の生活、障がいがある人の生活は、その人や家族にとっては当たり前のことだと思います。もちろん不便なことはあると思います。それも、人それぞれです。でも、その不便さから家族や周りの仲間とサポートし合う関係、お互いを大切にできる関係が生まれているのではないのでしょうか。

「耳が聞こえないから」「自分とは違うから」そのようなことで相手を決めつけることは絶対にしたくありません。して欲しくありません。自分と周りの人との「当たり前」の境目は違うかもしれません。でも、相手を正しく知ることが、相手に優しくなれるきっかけだと思います。共生社会とは、お互いの良いところを生かし合って、生活することではないのでしょうか。自分がしたことで相手が喜んでくれたら嬉しいし、その逆も大切です。「してあげる」ではなく、「お互いが支え合う」そんな対等な関係でいられる自分でいたい。そして、そんな社会にしたいです。